

一九一〇年代、曹洞宗大学で学んだ四人の朝鮮留学生

— 李混愷、金晶海、李智光、鄭晔震 —

佐藤 厚

一、問題の所在

筆者は今年度から本学で「韓国仏教史」の授業を担当させていただいている。近代を扱った回では駒澤大学と朝鮮との関係について触れた。すなわち①朝鮮からの留学生、②児童教育部を中心とした朝鮮で活動した駒澤大学学生、③朝鮮で活動した駒澤出身の学者である江田俊雄の業績などである。誠に僭越ながら、これらのことから、本学でもご存知の方は多くないと思われるので、この場を借りて発表させていただくことにした。

上に挙げた項目の中、本稿では朝鮮からの留学生、具体的には一九一〇年代に、駒澤大学の前身である曹洞宗大学に最初に留学した李混愷（イ・ホンソン一八八五—？）、金晶海（キム・ジョンヘ一八七九—？）、李智光（イ・チグアン一八八五—？）、鄭晔震（チョン・ファンジン一八九一—？）の四名をとりあげる。この中、最初の三名は一九一四年（大正三）に来日し、後の一名は一年後の一九一五年（大正四）に来日した。戦前の朝鮮からの留学生は三二人いたとされるが、ここで四名だけをとりあげた理由は、彼らの資料が多く残っていることと、帰国後の活動も判明しているからである。本稿では第一に、留学の経緯や留学中について、第二に、帰国後の活動に分けて整理した。管見では駒澤大学の朝鮮留学生を扱った研究はないようである。

これにより駒澤大学という場における近代の日本と朝鮮の交流の一端を明らかにし、大学史研究にも貢献できればと考えている。なお論文中で使用する大学史資料については【大学史資料】と表示をし、その後に仮に付けた文書名を記した。

二・一九一〇年代の韓国仏教界と四人の朝鮮留学生

統一新羅時代から高麗時代、すなわち七世紀から一四世紀にかけて朝鮮半島の仏教は盛んであった。ところが一四世紀末から始まる朝鮮時代になると儒教を中心とする国家運営の立場から仏教は抑圧の対象となり、宗派の統合、僧侶の還俗、僧科（僧侶認定試験）の廃止に加え、僧侶が都である漢城（現在のソウル）への立ち入りを禁止されるなど苦境に立たされた。一八七六年（明治九）、日本によって開国させられると、真宗大谷派をはじめとする日本の仏教宗派が進出するようになった。その後、日清戦争で日本が勝利すると、日本の影響力はさらに強まり、仏教界でも日蓮宗の佐野前助（一八五九—一九二二）が、僧侶の漢城立ち入り禁止令撤廃を朝鮮王朝に申し入れ、それが認可された。朝鮮王朝は大韓帝国へと国名を変更して近代化に乗り出す改革は難航し、一九〇四年（明治三七）からの日露戦争で日本が勝利すると日本の影響は確固たるものになった。こうした中、一九〇八年（明治四一）、それまで統一した組織をもたなかった朝鮮仏教界は円宗という名の宗名のもとで合同し李晦光（一八六二—一九三三）が代表となった。そして李晦光は日本の曹洞宗と円宗との合同を図ったが、これが実際には円宗すなわち朝鮮仏教界が曹洞宗に吸収される形のものであったことが明らかになると、反対した僧侶たちは臨濟宗を組織し円宗は分裂した。

そうした中、一九一〇年（明治四三）に大韓帝国が日本に併合されると、その翌年一九一一年（明治四四）には朝鮮仏教界を統制する寺刹令が發布された。これは朝鮮全土の寺院を三十の本山とその傘下である末寺とに分類し、本山住職は総督府が任命するというものである。これにともない円宗や臨濟宗などの問題は消えてしまった。また本稿に関連する事項として、曹洞宗の京城別院について触れておく。それは曹洞宗の朝鮮布教の根拠地で、韓国併合翌年の一九一一年（明治四四）に設置された。初代の開教総監は北野元峰で、一九一一年から一九一五年まで務めた。この時期に曹洞宗大学への留学も行われた。日本の朝鮮進出と曹洞宗との関係については一戸彰晃『曹洞宗は朝鮮で何をしたのか』（皓星社、二〇一二年）に詳しい。

こうした時代の変化の中、朝鮮仏教界は布教や研究などの課題に直面した。その解決のヒントが、一足先に近代化した日本仏教であり、その中で留学生の派遣を行なったのである。近代韓国の仏教学者である李能和（一八六九—一九四三）は『朝鮮仏教通史』の中で、大正三年に一三名の留学生が派遣されたことを述べ、曹洞宗大学に李智光、金鼎海、

李混愷、鄭昞震。真言宗の豊山大学に曹学乳。東洋大学に李鍾天⁽⁴⁾。日本大学に金道源に入り、その他は臨済宗大学に入ったという⁽⁵⁾。ただし李能和は曹洞宗大学に四名が同じく入学したと書いているが、実際には李智光、金晶海、李混愷の三名は一九一四年(大正三)に、鄭昞震は一九一五年(大正四)に入学している⁽⁶⁾。

曹洞宗大学の朝鮮留学生について、【大学史資料】「作成時期不詳…朝鮮留学生」には、五名の留学生の氏名、出身寺院、師僧、生年月日が記されている。

〈表一〉留学生の氏名、出身寺院、師僧、生年月日

氏名	出身寺院	師僧	生年月日
金晶海	朝鮮京畿道水原郡禪教両宗大本山 龍珠寺	住持 姜大蓮	明治一二年三月七日
李混愷	朝鮮江原道淮陽郡金剛山 長安寺	住持 玄宝光、師僧 林碧河	明治一八年一〇月二三日
李智光	朝鮮江原道杆城郡大本山 乾鳳寺	住持 趙世果	明治一八年二月二八日
鄭昞震	朝鮮慶尚南道河東郡花開面 双溪寺	前住持 徐起龍	明治一四年一月一七日
金道源	朝鮮慶尚南道東萊郡 梵魚寺	住持 呉愷月	明治一四年一二月二五日

この資料は、彼らの正確な生年月日が記載された資料として貴重である。この中、最初の金晶海、李混愷、李智光の三名は、一九一四年(大正三)四月に高等部に入學して翌年卒業し、そのまま大学部に進んで一九一八年(大正七)七月に卒業した。鄭昞震は一年遅れて一九一五年(大正四)四月に入學し、一九一九年(大正八)七月に卒業している。金道源は鄭昞震と同じ一九一五年(大正四)四月に入學したが、後、除籍になっている。

また【大学史資料】「一九一七年九月作成…曹洞宗大学朝鮮留学生姓名」には、金晶海、李混愷、李智光、鄭昞震とともに李成春の名が記されているが、一九一八年(大正七)七月に亡くなったという⁽⁷⁾。その間の行跡は不明であり今後の調査を待つ。

三、曹洞宗大学への留学

(一) 当時の曹洞宗大学

留学生たちは一九一四年（大正三）に入学したのであるが（鄭は翌年）、その当時の曹洞宗大学について知るために、まず明治以来の簡単な沿革を記す。

一八七五年（明治八）、曹洞宗は、東京の駒込吉祥寺内に曹洞宗専門本校を開校した。一八八二年（明治一五）に麻布北日が窪に校舎を移転し曹洞宗大学林と改称した。一八九九年（明治三二）、私立学校令により東京府知事の認可を受け学制を改正した。一九〇三年（明治三六）、専門学校令が發布されて学制変更の必要を生じ、曹洞宗高等学林を併合して、大学林内に高等部、大学部の二部を設置した。翌年専門学校令の認可を受けた。一九〇五年（明治三八）一月、曹洞宗大学林を改めて曹洞宗大学と称した。一九一三年（大正二）、駒澤校舎に移転した。同時に学制を改正し、高等部を一年三か月、大学部を三年とした。

このように朝鮮留学生が入学した一九一四年（大正三）は駒澤校舎に移転して学則を変更してから二年目の、大学の再出発にあたる時期であった。学長は秋野孝道であった。

当時の大学の入学、卒業者の人数や学費などの記録が【大学史資料】「大正五年二月一日…曹洞宗大学 朝鮮の憲兵からの問い合わせ」に残っている。

まず一九一四年から三年間の入学者、卒業者の数は次の通りである。

〈表二〉

年	入学者	卒業者	在学年数
大正三年（一九一四）	99	29	5
大正四年（一九一五）	80	32	5
大正五年（一九一六）	99	31	5

*大正四年四月以降の入学者は修業年限四か年五か月

また、同資料には、一九一六年（大正五）当時の学生総数は三五五人であったこと、学費は平均一か月一五円である

が朝鮮人は一五円以上であったこと、食費の他、月謝及び宿料は一切徴収しないこと、が記されており、当時の状況がわかる。

ちなみに一九一五年（大正四）一二月末現在、日本にいた朝鮮人は合計四〇七五人。うち学生は四八一人で、東京だけで三六二人いた。⁸⁾

（二）留学生の経緯

続いて曹洞宗大学への留学の経緯に話を移す。彼らが留学を志したきっかけは様々なものがあつただろうが、多くは出身寺院の方針であつたと思われる。李混愷の出身である長安寺の場合、寺院の財産は豊かでなく細々と維持してきたが、現在の時勢の変遷を覚醒し、僧侶たちが協議した結果、内地留学生の派遣を決めたという。⁹⁾ では具体的にどのような経緯で曹洞宗大学に留学するようになったのであろうか。金晶海の場合、曹洞宗京城別院の布教使、寺田有全¹⁰⁾のあつせんであつたという。曹洞宗京城別院とは、前に触れた、曹洞宗の朝鮮布教のための寺院である。金晶海以外の人物についても京城別院との関係がありそうである。大学史資料には李混愷の記録が残っている。【大学史資料】大正三年四月四日・
沖津元機発・李混愷宛 文書」には次のようにある。

朝鮮江原道淮陽郡金剛山長安寺 止住

李混愷

本年三月十五日附 本宗両本山京城別院ノ推選ニ依リ聴講生トシテ本宗大学ニ留学スルコトヲ許可ス、仍テ左記事項ヲ承認実
行スベシ

- 一 食費及電灯料ヲ毎月曹洞宗大学ニ納付スベシ
- 一 曹洞宗大学規則並、同大学職員ノ為ス臨時ノ教誡ヲ遵守スベシ
- 一 寄宿舎ハ一般内地学生ト同室ニ止住シ同一食物ヲ饗ケ不都合ノ行為アルベカラズ
- 一 舎内ニ在テハ衛生ヲ重シ室内並ニ身体ヲ清潔ニスベシ

大正三年四月四日

教学部長 沖津元機

これによると三月一五日付で京城別院の推薦がなされ、それをうけて曹洞宗大学に留学するようになったことがわかる。おそらく他の二人も似たようなものと推測される。また、この資料からは、食費と電灯費を大学に収めていたこと、彼らが寄宿舎で生活をしたことなど、具体的な生活の様子をうかがうことができる。

また【大学史資料】「大正三年四月四日…沖津元機発…学長秋野孝道宛 文書」には次のようにある。

今般朝鮮江原道淮陽郡長安寺選出李混悞、別紙ノ通願出テタルニ付、其ノ学聴講生トシテ入学ヲ許可シ一般学生ト同一取扱ヲ為シ高等部並ニ本科ノ各学科ヲ聴講履修セシムヘシ、依テ茲ニ推選書、入学願、保証書、及本人履歴書ヲ移牒ス

大正三年四月四日

教学部長 沖津元機

ここには必要書類として推選書、入学願、保証書などが記されているが、これらは残っていない。この文書で注目されるのはこれを記した用箋が曹洞宗務院のものであることである。ここからも朝鮮留学生が教団の案件であったことがわかる。これをうけて大学側も受け入れの準備を進めたことが、【大学史資料】「作成日不詳…朝鮮留学生取扱ニ関スル書類抄録」からわかる。これは朝鮮留学生受入に関する通達などを集めたものである。それには例えば一九一一年（明治四四）に発布された文部省令第一六号「文部省直轄学校外国人特別入学規定ハ台湾人、若ハ朝鮮人ニ之ヲ準用ス、但シ其入学ニ関シテハ台湾総督府又ハ朝鮮総督府ノ紹介ヲ要ス」など、様々なものがある。

(三) 履修科目について

彼らは曹洞宗大学でどのような科目を履修したのであるか。まず彼らが所属した課程と、そこに準備された科目を見ていく。彼らは別科を卒業したのだが、別科の定義と課程を『曹洞宗大学一覧…大正一〇年度』には次のように規定されている。¹³⁾

第一条 本学別科ハ本科ニ入学ノ資格ナキモノニシテ高等部及大学部ノ学科を修メントスル者ノ為メニ之ヲ設ク

第二条 別科ノ修学年限学科課程總テ本科ニ同シ但シ別科生ハ英語ノ一科ヲ随意科トスルコトヲ得

この中、第一条では入学の資格が問題となつてゐる。曹洞宗大学は曹洞宗の僧侶となる者が対象であるから留学生が本科に入らないのは当然である。続いて第二条に「修学年限学科課程總テ本科ニ同シ」とある。では本科はどれだけの授業があるかといえば高等部が（表三）、大学部が（表四）のようである。ただし、これは一九二二年（大正一〇）のものであるから、留学生たちが受講したときとは異なつてゐる可能性があるので、あくまでも目安である。

（表三）高等部課程表

科目種別	一年		二年	
	宗乘	参同契宝鏡三昧不能語 五位說不能語	参同契宝鏡三昧不能語	從容錄
実修	参禅	参禅		
余乘	口授	口授		
修身				
歴史				
哲学	論理学	哲学概論、心理学		
国語	講読、作文	同上		
漢文	講読、作文	同上		
英語	講読、作文、文法、会話	同上		

〈表四〉 大学部課程表

科目種別	一年			二年			三年		
	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
宗乘	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
余乗	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
歴史	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
宗教	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
哲学	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
英語	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
布教法	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
選択科目	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科
選択科目	実修	実修	学科	実修	実修	学科	実修	実修	学科

* 選択科目

甲	乙
余乗	実科
宗教	文学及語学
余乗	宗制宗法宗規、各種教育法、各種感化救済法、社会改良法等
宗教	仏教系統、俱舍、因明、三論、唯識、天台、華嚴等
余乗	神道要義、基督教教理史、宗教哲学、各種宗教、仏教美術史等
宗教	各国文学、独逸語、巴利語、梵語等

科目種別は大きく、宗乗、余乗、歴史、宗教、哲学、英語、布教法、選択科目の八種に分かれる。宗乗は曹洞宗の宗学と実践、余乗は天台、真宗、浄土、日蓮、真言という他宗についての学習、歴史は禅宗史である。宗教、哲学、英語の次にあるのが布教法であり、様々なものを学ぶようになっている。

このようなカリキュラムに対して留学生が履修した科目の一覧が大学史資料の中にある。【大学史資料】「作成日不詳…朝鮮留学生成績及学科担任教師一覧」がそれであり、この中には、学年別に受講した科目名と講師肩書、講師氏名が記

されている。それは〈表五〉の如くである。

〈表五〉留学生が受講した科目と講師名

学年	科目名		講師肩書		講師氏名
高等部	宗乗		教授		高階瓏仙
	余乗		教授		原田祖岳
大学一年	宗教学		文学士 講師		早船慧雲
	西哲		同		若守義孝
	心理		文学士 講師		福来友吉
	禅宗史		曹洞宗学師 講師		松田湛堂
	印哲		文学士 講師		木村泰賢
	倫理		米国哲学博士		中根環堂
大学二年	三論玄義		文学士 講師		木村泰賢
	華嚴		同		衛藤即応
	支那哲		同		宇野哲人
	印哲		文学士 講師		木村泰賢
大学三年	教育		同		高田儀光
	社会		文学博士 講師		建部遯吾
	原始仏教論		文学士 講師		木村泰賢

これを見ると、高等部では宗乗と余乗だけを履修し他の教科を履修していない。大学部では一年で四科目、二年で五科目、三年で四科目を履修している。これを〈表四〉と比べると、数が明らかに少ないことがわかる。そして選択している科目も、西洋哲学、心理学、教育、社会と、仏教学以外のものが多いのが注意される。

ここから別科を卒業したとはいえ、彼らの修学が規定にあつたような「修学年限学科課程総テ本科ニ同シ」ではなく、おそらく聴きたい科目を聴いてもらうという形ではなかつたかと推測される。試験についても聴講したすべての科目の試験を受けたわけではなく、大学部一年で受験したのは、宗教学、西哲、心理で禅宗史は受験しなかつた。二年では、印哲、

倫理、三論で、華嚴と支那哲は受験していない。三年では、印哲、教育、社会、原始仏教論を受験している。これは三名とも同じである。このことについて参考になる資料が【大学史資料】「大正七年四月一七日・曹洞宗大学長秋野孝道発…朝鮮留学生監督 荒木捨作宛…回答」である。これは一九一八年（大正七）四月、朝鮮留学生監督の荒木捨作から曹洞宗大学に成績優秀な朝鮮留學生の推薦を依頼する文書が届き、それに対する大学の回答である。その中で秋野は成績について「全学科二付試験セス特種科目二三宛試験執行二付、優落等定メズ特別扱ヒヲナセリ」（下線筆者）と述べている。この「特別扱ヒ」という言葉に象徴されるように、ある意味で「お客さん」的な位置づけでの留学ではなかつたかと推測される。

(四) 在学中の言論活動

留學生たちは在学中に多くの文を書き、朝鮮仏教界の雑誌や新聞で発表した。ここではいくつかを紹介する。李混愷は、一九一五（大正四）年三月二日付の朝鮮の新聞『毎日申報』に「内地の宗教分布」を寄稿し、日本の宗教の状況を整理した後、「以上の如き多大な宗教力により、日本帝国全土に散布して宗教の道德精神を一般人民の脳髓に注入し、確固不拔なる大堅固力を得て自在受用なのである。我が半島同胞もまたこの際に当り、宗教に対する思想を興起する時機が到来した」と朝鮮仏教界の奮起を促している。同五月には「撃讀仏教振興会月報有感」を著わし、日本では仏教を崇拜して仏教の拡張の競争を行い、自国での伝道布教はもちろんのこと、異域万邦にも出かけているのに対し、朝鮮の場合は長き眠りについており現実が見えていないと述べ、その沈滞ぶりを嘆いている。さらに一九一八年（大正七）七月には「世界に誇る日本大藏経の出版」と題し、一九一四年から刊行が始まった日本大藏経について紹介し、読者の中で関心がある方は自分に連絡してくれば編纂委員会に連絡して目録などを送ってもらえるようにすると述べている。¹⁵⁾

金晶海は一九一四（大正三）年に『毎日申報』（七月一六日付）に「東京から」という題目の記事を書いている。そこでは日本の新聞では仏教徒の大事業や仏教青年会の組織など、仏教が活発に活動していることが報じられるが、朝鮮の新聞で掲載されるものといえば僧侶の不祥事が多く対照的であると述べる。そして話を僧侶の妻帯に移し、朝鮮の僧侶で妻帯しているものは多いが、寺とは別の場所に妻子を置いている。これは不健全なことである。実は積尊も妻帯を禁じてはいない。日本では、南条文雄、村上専精、加藤咄堂などの諸氏は僧侶でありかつ妻帯しているにもかかわらず社会の尊敬を受けている、と記す。一九一六年（大正五）「仏教振興の機運」¹⁶⁾は、朝鮮仏教の教育機関である中央学林の設

立決定への感想である。その中で寺院の運営に触れ、日本では全ての国民が仏教信徒になっており、信徒の中から檀家総代を選び、この総代が寺院の維持、教育、布教にかかる経費を信徒から徴収して運営が円滑に行われている。朝鮮の仏教はこれとは正反対で具体的な機関がなく金融も困難であるとし、改善を訴える。

李智光は一九一五年（大正四）七月に「中央学林勸設に對して」¹⁷を著わし、設立が予告された中央学林について仏教教育の重要性を訴え、その中では島地黙雷、赤松連城、南条文雄ら多数の日本人僧侶の名を挙げ朝鮮でも同様の人士が出て教育に当たるべきことを説く。一九一七年（大正六）四月には「英米の宗教」¹⁸を書いた。これはハワイ布教および米英の宗教調査を行い帰国した曹洞宗僧侶・岡田大豊を李智光が訪ね、欧米のキリスト教会の現状を聞いたものである。それら英米の宗教の状況を朝鮮仏教界に知ってほしいという心から書いたという。

以上三氏の発言は、日本の仏教界や学術の情報を知らせ、朝鮮仏教に奮起を促すことで共通している。これにより留学生としての役割を果たそうとしたことがわかる。ただ、金晶海の妻帯僧をめぐる記事はデリケートな問題である。日本仏教をモデルとする時、布教や学術などとともに僧侶の妻帯の問題が出てくる。実際、留学僧を中心として韓国の僧侶は妻帯をし、一九四五年の段階では九割の朝鮮僧侶が妻帯していたといわれる。金晶海の記事はその動きの先駆けともいえる。

一方、留学生の動向には日本の警察当局の監視の目が向けられていた。内務省の組織である警保局保安課が作成した資料には、李智光が一九一八年（大正七）四月一日に神田松本亭で、朝鮮留学生の親睦団体である学友会主催で開催した卒業生祝賀会の席上で、次の演説をしたことが記されている。¹⁹

国ヲ愛スル主義ニ三アリ、隱退主義、冒險主義、穩健主義之ナリ、隱退主義トハ国ノ衰退ヲ嘆キテ世上ヨリ隱退スルモノ、冒險主義ハ自己ヲ犠牲トシテ表面ニ活躍スルモノ、穩健主義ハ表面敵ノ歎心ヲ買ヒ裏面ニ於テ自国ノ為ニ謀ル処アルモノヲ謂フ、吾人ハ冒險又ハ穩健主義ニ賛成スルモノナリ、安重根ハ冒險的愛国者、越王勾踐ハ穩健的愛国者ナリ云々（句点筆者）

伊藤博文を暗殺した安重根を冒險的愛国者とし、これを自分も標榜すると述べたことは、危険思想ともとられかねない

危ない演説といえよう。

これらに対して鄭昞震の場合は、朝鮮仏教に覚醒を促すような文はなく、学術が中心となる。鄭は後述するが朝鮮では失われた新羅高麗典籍の搜索を行っており、論文もその関係が多い。「晋訳華嚴經疏序」釋元曉撰、鄭昞震記送（『朝鮮仏教叢報』第一二号、一九一八年一月）、「一覽表考編緒言」（同一三号、一九一八年二月）、「仏教史学研究…海東瑜伽正宗初祖憬興國師」（同一四号、一九一九年二月）、「仏教史学研究（続）…海東瑜伽正宗初祖憬興國師著述総覽表」（同一五号、一九一九年五月）などである。

（五）卒業と朝鮮総督府への指導の依頼

一九一八年（大正七）七月一日、李智光、金晶海、李混愷の三名は曹洞宗大学を卒業した。翌日、秋野学長は朝鮮総督府の内務部部長宇佐美勝夫に、三名に対する指導を依頼している。【大学史資料】「一九一八年（大正七）七月二日…曹洞宗大学長 秋野孝道発…朝鮮総督府 宇佐美勝夫宛」には「添書」として「大正七年度卒業生、李智光、金晶海、李混愷」の名前を掲げた後、「右之者、大正三年四月本学ニ入学以来、専ラ学業ニ励ミ本年七月一日卒業致候、仍テ帰国ノ上ハ布教伝道ニ従事可致ニ付其ハ何卒万事ニ御指導ト御便宜トヲ御与ヘ被下度此段御依頼申上候也」と述べている。これは彼らの留学が本来、教団レベルのことであり、朝鮮仏教界が総督府の支配を受けていることを考えると、うなずけることである。こうして三名は四年半にわたる曹洞宗大学での生活を終え、朝鮮に帰った。

四. 卒業後の活動

（一）帰国と歓迎会

一九一八年（大正七）七月九日、帰国した三名はまず朝鮮総督府に赴き関係部局に帰国の報告を行った。その後、一日から一六日まで様々な寺院で朝鮮仏教界の歓迎会が行われた。朝鮮仏教界の雑誌『朝鮮仏教叢報』一一号には、「曹洞宗大学を卒業した三氏を歓迎す」（左頁写真）という記事があり、その中では、帰国した彼らに対して、「昨日正しいことでも今日正しいとは限らない。時代は変化している。仏教でも昔ながらの仏教では世の中の人に聞いてもらうことはできない。よって従来の仏教学以外に、仏教哲学、仏教心理学、仏教倫理学が必要である。その他、宗教学も必要であ

曹洞大學을卒業한三氏를歡迎

道俗一同

乾陀寺의李智光,龍珠寺의金龍海,松石寺의李混愷三氏는大正二年에東下崔原郡의曹洞宗大學에入學하여本年即大正七年夏期에同大學을卒業三氏는同事佛敎을하여宗敎에邁進하다
臨坪의國大의佛敎을興發以來三國佛敎의高僧領袖의支那에遊學,印度에遊學,檀那에佛敎,扶桑에佛敎,一等的佛大正七年來은자吳一世는繼日로佛光明刹을爲念法兩로佛宗潤利하다니李混愷五百年間,淨戒三千里內에法雨一垂靈을하여欲波마아迺者에
朝鮮總督府의寺刹令을受領하여佛敎을外護하고京城佛堂寺의布敎堂을白玄土를誘引하여天上의法鼓를自鳴할時以하고石下의燃香을出起을統領하고玄石土의佛敎通史를讀하면朝鮮在古來今の佛敎消長興衰를瞭然히指示하리로다

ここから朝鮮仏教界首脳がかれらに期待をしていることがわかる。続いて帰国後の活動を一人ずつ見ていく。

(一) 李混愷

一九一八年（大正七）、二三歳で帰国した李混愷は『朝鮮仏教叢報』の主筆を務め、翌年に三十本山連合事務所の財務長に就任した。帰国の歓迎会で金九河が述べた通り、朝鮮仏教界の首脳部に入ったのである。この年から雑誌に「仏教心理学」という題目の連載を始めたが、これは帰国を歓迎する記事中で、仏教界に求められたものである。この本には種本があり、それは日本の東洋大学の前身である哲学館を作った井上円了（一八五八—一九一九）の『仏教心理学』（哲学館講義録、一八九八年）である。

一九二二年（大正九）には当時の実力者であった姜大蓮が親日傾向を示したとして批判を浴びたのに対して姜大蓮と親しい李混愷は姜を擁護した。また同年から二年間、東光学校の校長を務め、東光学校が宝城高等普通学校に合併されたからは京畿道驪州市の神勒寺住職に就任した。

一九二五年（大正一四）に朝鮮神宮鎮座大祭が行われた。これはソウルの南山に明治天皇を祀る朝鮮神宮を作ったときの儀式であり、それに仏教界を代表して参加した。同年一月、東京の芝増上寺で東亜仏教大会が開催された。李混

る。」と新たな仏教のありかたを求めている。

続いて覚皇教堂で開催された歓迎会の模様が記される。出席したのは、三十大本山連合事務所委員長 金九河、大本山龍珠寺住持・姜大蓮をはじめとする朝鮮仏教界の首脳である。挨拶に立った金九河は、三人のこれまでの苦勞を慰め、朝鮮仏教の前途有望に対する言葉と彼らを仏教中央機関に採用するという意味のことを述べた。そして姜大蓮、この人は金晶海の師僧であるが、三人が協力して如来の大法を担うことを励ました。ついで金南泉が挨拶し、三人は答辞を述べた。

惺も朝鮮仏教中央教務院代表として参加し、一月二日に中国の太虚（一八九〇—一九四七）が主宰する教義宣伝部会の中で「教義宣伝報告、並びに本会に対する希望」という発表を行った。また一月六日には母校である駒澤大学を訪れ、学監山上曹源の案内で学校を視察し、校長の忽滑谷快天（一八六七—一九三四）と茶話を行った。

一九二六年（大正一五）には朝鮮仏教中央教務員評議員会の委員に就任した。この年は朝鮮仏教界にとって重要な出来事があった。それは僧侶の肉食妻帯が公認されたのである。これについて李混惺は「時勢への順応、仏教の社会化」と述べ肯定的な見解を示している。一九二七年（昭和二）には四一歳で楡岾寺の住職に就任した。一九二八年（昭和三）には中央教務院の評員会議長に就任した。一九三一年（昭和六）に楡岾寺住職を辞任した後には一九四〇年（昭和一五）に長安寺の住職に就任した。彼は一九四五年（昭和二〇）の解放後も活動し、一九五一年（昭和二六）には週刊『仏教新聞』の顧問と財団法人東国学園理事長を歴任した。『親日僧侶一〇八人』を著わしたイム・ヘボンが李混惺を「日本留学後に重用された親日僧侶」と表現している。

(三) 金晶海²⁶⁾

金晶海は帰国からしばらく出身寺院である龍珠寺の法務を経て、李混星の後任として雑誌『朝鮮仏教叢報』の主筆となり、また「仏教哲学概論」、「宗教的新意義」、「大乘的仏教精神の振興」など様々な論文を発表した。この中、「仏教哲学概論」は李混惺「仏教心理学」と同様、朝鮮仏教界に求められた論文である。完結することはなかったが、「仏教哲学」という概念を朝鮮に初めて紹介したもので意味があると考えられる。この論文の種本は、日本の仏教学者、石原即聞の『仏教哲学汎論』（博文館、一九〇五年）である。

一九一九年（大正八）には仏教中央学林の学監となったほか、一九二〇年（大正九）に楊州郡の普光寺住職を務め、一九二二年（大正一一）には大本山伝燈寺住職となった。伝燈寺は三十本山の一つであるから出世といえる。一九二〇年代に朝鮮仏教界が保守派の中央教務院と改革派の中央総務院とに分かれて争うようになると、金晶海は保守派の側に立って活動し、一九二三年（大正一二）には相手側から暴行を受けた。

一九三〇年（昭和五）、金晶海は会計問題などにより寺から追放されるも、その後、朝鮮仏教界が運営していた宝城高等普通学校の代表理事を務めた。一九三六年二月には『仏教時報』に「心田開発の三大原則について」²⁷⁾を発表した。心

田開発とは、朝鮮人を日本人化するための運動であり、一國体觀念の明徴、二敬神崇祖の思想及び信仰心の涵養、三報恩・感謝・自立の精神の養成である。その後、一九三六年三月に中央教務員理事を辞任して以後の足取りは不明である。

二〇〇八年（平成二〇）、民族問題研究所は植民地時代の日本に協力したかどで金晶海を「親日人名辞典収録予定者リスト」に選定した。イム・ヘボンは「日本に留学した親日性向の本山住職」と表現している。

(四) 李智光

李智光は帰国後に仏教界の教育機関である中央学林の教員になり僧侶教育に尽力した。また帰国直後の一九一八年には「仏教倫理学」を連載しているが、これは李混惺「仏教心理学」、金晶海「仏教哲学概論」と同様、近代的な仏教の学問を韓国に紹介したものである。種本は蜷川竜夫『仏教倫理学』（博文館、一九〇六年）である。彼は布教方面にも力を注ぎ、「人の教え」、「仏教とは何か」、「八関斎の精神」、「徹底せよ」などの題目の日曜講演を行った。晩年は桐華寺所属の大邱布教所で活動をした。その他、「仏教と人生」、「修養と心経」などの記事を書いた。

(五) 鄭昞震

鄭昞震は、李混惺ら三名から一年遅れて一九一九年（大正八）に大学を卒業し一二月に帰国した。鄭昞震の留学の主な目的は李能和が構想した『朝鮮仏教総書』刊行の準備のためであった。³¹『朝鮮仏教総書』とは、朝鮮の僧侶の著作だけを集めた叢書である。ところで新羅高麗の多くの典籍は朝鮮では失われ、日本に残っているものが多い。朝鮮僧侶は日本で卍統藏経が刊行されると、その中に元暁や太賢など新羅時代の僧侶の著作が含まれていることを知り衝撃を受けた。そこで李能和の依頼を受けた鄭は、朝鮮文献が収録されている卍統藏経のうち、購入できるものは購入し、できないものは曹洞宗大学の図書館で神経痛に苦しみながら筆写したのであった。³²

こうした準備を経て一九二〇年（大正九）二月、李能和が朝鮮仏教会を設立して



鄭昞震氏著『金晶海三昧經論』（本学図書館蔵）

具体的な刊行計画を推進し始めた。同年の五月、鄭は再度日本を訪れており、そこで当時、大正大学で講義していた今津洪嶽（一八八四—一九六五）と交流をもった。その経緯を簡単に紹介すると、鄭は神田の古書店で今津の論文「元曉の事蹟と思想」を読み感動し、今津の他の論文が収録される『宗教界雑誌』を読もうとしたが曹洞宗大学の図書館にはなかった。鄭は図書館職員の小川靈道に「図書も揃っていないのに大学令の昇格なんてよくいえたもんだ」と冗談を言った。鄭は知り合いから今津の自宅住所を聞き、日曜日に約束もなく訪れた。それにもかかわらず今津は鄭を親切に迎えた。鄭が今津に朝鮮仏教総書刊行の話をする、今津は興味を示し、自分も協力すると述べる。また、初対面にもかかわらず、今津は鄭に貴重な書物を貸し与えたという話である。鄭はこれを「今津洪嶽老師訪問記」と題して発表した。

一九二二年（大正一〇）、鄭は朝鮮の中央学林の教師を務めている。一九二三年（大正一二）二月には中央教務院傘下の朝鮮仏教協成会の庶務兼宣教部長に就いた。これらは教務院にいた李混惺との関係によるのかもしれない。同月、教務院と総務院との間で争いが起こると鄭も巻き込まれた。同年一〇月、朝鮮仏教会が元曉の『金剛三昧経論』を刊行すると、鄭はこれを駒澤大学の図書館に寄贈した。これは現在も図書館に保存されている。³⁴（書影写真は駒大史ブックレット六、六一頁より）

ところで『朝鮮仏教総書』刊行事業は、一九二五年（大正一四）に刊行目録を発行し予約募集を開始した。目録には刊行予定書目として五二三種の典籍名が挙げられている。しかし予約は思うように集まらなかった。そこで鄭は中国の近代仏教の大家・太虚に手紙を送り、『朝鮮仏教総書』の紹介と予約の呼びかけをお願いし、太虚は雑誌『海潮音』一九二五年第一〇期（一九二五年二月）に掲載した。一方、当時、曹洞宗大学の学長を務めていた忽滑谷快天が協力を申し出た。一九二七年（昭和二）、忽滑谷は駒澤大学の雑誌『第一義』で『朝鮮仏教総書』刊行計画を紹介し、それに卒業生の鄭昞震君が加わっているので協力をしてほしいと次のように述べている。³⁵

駒澤大学卒業生鄭昞震氏が十有余年の努力を以て蒐集せる朝鮮高僧の経論疏积録史伝等の珍籍は、朝鮮仏教研究上唯一無比の宝典なれば、購読者一千名に満つるを待つて刊行する予定に有之候、有志諸君は至急左記へ御申込願上候。但し菊判洋装四百頁一冊代金五円 十八冊乃至二十冊にて完成の見込

東京市外駒澤町駒澤大学内 忽滑谷快天

卒業後の動向は様々であったが、大きくは李混惺、金晶海という僧侶世界の中心で活動する人々、李智光のように教育や講演を中心に活動する人、鄭眺震のように学術方面で活動する人に分けられた。これは本人の志向が大きいであろう。彼らにとって日本留学とは、仏教界の在り方や学術など、朝鮮仏教を改革すべきモデルを学びに行くことであった。ただ、本文でも触れた僧侶の妻帯は戦後に大きな問題となる。一九四五年の解放時には約九割の僧侶が妻帯僧だったが、独身僧が曹溪宗、妻帯僧が太古宗を組織している。このきっかけの一端を作ったものとして朝鮮仏教界にとって留学生たちはもろ刃の刃であったといえよう。

植民地時代のことについては親日か否かなど単純な分類で処理し、それ以上の個別の細かな状況には目が向かない風潮がある。しかし人間の活動とは本来多面的であり矛盾した面も多い。よってそうした物差しだけで判断してしまうのは実相を捉えられないと思う。そうした人間の活動があつて時代が形成され、それが現在の私たちにつながるわけであるから、彼らがどのように行動し何を考えていたのかを具体的に明らかにしていくことが必要であると考える。

〈参考文献〉

・日本語

一戸彰晃『曹洞宗は朝鮮で何をしたのか』（皓星社、二〇一二年）

金光植編、東アジア仏教運動史研究会訳『一九〇〇～一九九九 韓国仏教一〇〇年 朝鮮・韓国仏教史図録』（皓星社、二〇一二年）

駒澤大学開校百二十年史編纂委員会『駒澤大学百二十年史』（駒澤大学、二〇〇三年）

光山覚音編『曹洞宗大学一覧・大正二〇年度』（曹洞宗大学、一九二二年）

佐藤厚「二〇〇年前の東洋大学留学生、李鍾天―論文「仏教と哲学」と井上円了の思想―」東洋大学国際哲学研究センター『国際哲学研究』四、二〇一五年

同『朝鮮仏教総書』刊行計画について（一）目録の紹介」東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五二、二〇一五年

同『朝鮮仏教総書』刊行計画について（二）…計画の経緯」東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五三、二〇一六年

・韓国語

イム・ヘボン『親日僧侶一〇八人』（青年社、二〇〇五年）

〈謝辞〉

本稿を作成するにあたり、禅文化歴史博物館学芸員の塚田博先生には資料閲覧の便宜を図っていただいた。また、東国大学大学院の小河寛和さんには韓国にある資料を送っていただいた。駒澤大学教授・奥野光賢先生には拙論と関連する論文として先生御論文「駒澤大学図書館と『禅籍目録』」（駒澤大学仏教学部論集）第四十四号、二〇一三年、「清水梁山と曹洞宗大学・駒澤大学」（駒澤大学仏教学部論集）第五十号、二〇一九年）をご教示いただいた。駒澤大学名誉教授・石井公成先生には、忽滑谷快天が朝鮮留学生に親切だったのと同様、台湾の留学生にも親切であったことを論じた御論文「日本禪學的近代化與臺灣佛教——以忽滑谷快天與井上秀天為中心」（法鼓佛學學報）二十七、法鼓文理学院、二〇二〇年）を紹介していただいた。皆様方の学恩に感謝申し上げます。

注

- (1) 駒澤大学開校百二十年史編纂委員会『駒澤大学百二十年史』（駒澤大学、二〇〇三年）二二頁
- (2) 戦前の朝鮮仏教界の日本留学に関する論文として最近提出されたものに李成洙『二〇世紀前半留学僧の海外体験と時代認識研究』（東国大学校学位論文、二〇二二年）がある。
- (3) 一戸彰晃『曹洞宗は朝鮮で何をしたのか』（皓星社、二〇二二年）一二九頁、一三〇頁
- (4) 李鍾天については佐藤厚「二〇〇年前の東洋大学留学生、李鍾天——論文「仏教と哲学」と井上円了の思想——」東洋大学国際哲学研究センター『国際哲学研究』四、二〇一五年を参照
- (5) 李能和『朝鮮仏教通史』上編（新文館、一九一八年）六二二頁
- (6) ただ、これがあながち間違いでもないことに最近気づいた。鄭晧震は自ら、大正三年三月から大正九年二月二〇日まで七年間東京に滞在したことを述べている。（『毎日申報』一九二二年二月一日付「朝鮮古仏書蒐集に就いて」）ここから来日し

たのは大正三年であるが曹洞宗大学に入学したのが一年後の大正四年だったのかもしれない。

- (7) 『駒大史ブックレット五』三三頁によれば、一九一八年の一月に李成春の追悼会が開催されたという。
- (8) 『朝鮮人概況』（『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻、三一書房、一九七五年）五九頁
- (9) 『毎日申報』一九一五年三月二日付
- (10) 愛知県出身、一八八〇年生まれ。一九〇六年曹洞宗大学卒業、一九一一年布教使として朝鮮に渡り、京城別院の建築に活躍したほか朝鮮全道への布教所設立に尽力した。安藤嶺丸編『曹洞宗名鑑』（壬子出版社、一九一六年）二七二頁
- (11) イム・ヘボン『親日僧侶一〇八人』一一〇頁。原典は『毎日申報』一九一四年一月二七日付。
- (12) 光山覚音編『曹洞宗大学一覽、大正一〇年度』（曹洞宗大学、一九二一年）二二頁
- (13) 光山覚音編『曹洞宗大学一覽、大正一〇年度』（曹洞宗大学、一九二一年）二四頁
- (14) 『仏教振興会月報』三号（一九一五年五月）
- (15) 『朝鮮仏教叢報』一〇号（一九一八年七月）
- (16) 『朝鮮仏教界』二号（一九一六年五月）
- (17) 『仏教振興会月報』五号（一九一五年七月）
- (18) 『朝鮮仏教叢報』二号（一九一七年四月）
- (19) 「大正七年 朝鮮人概況」（『在日朝鮮人関係資料集成』第一巻、三一書房、一九七五年）七五頁
- (20) 『朝鮮仏教叢報』一一号（一九一八年九月）
- (21) イム・ヘボン『親日僧侶一〇八人』（青年社、二〇〇五年）「李混愷…日本留学後に重用された親日僧侶」一一九―一二八頁
- (22) 『朝鮮仏教叢報』第九号（一九一八年五月）、一〇号（一九一八年七月）、一二号（一九一八年十一月）、一三号（一九一八年十二月）、
- (23) 井上円了『仏教心理学』は『井上円了選集』第一〇巻に収録されている。
- (24) 『毎日申報』一九二六年五月二日付
- (25) イム・ヘボン『親日僧侶一〇八人』（青年社、二〇〇五年）「金晶海…日本に留学した親日性向の本山住職」一一〇―一一九頁
- (26) 『朝鮮仏教叢報』第五号（一九一九年五月）、一七号（一九一九年九月）、一八号（一九一九年十一月）、二〇号（一九二〇年三月）、二二号（一九二〇年五月）、二三号（一九二一年一月）

- (27) 『朝鮮仏教叢報』第一五号(一九一九年五月)、一七号(一九一九年九月)
- (28) 『朝鮮仏教叢報』第一八号(一九一九年一月)
- (29) 『仏教時報』七号(一九三六年二月)
- (30) 『朝鮮仏教叢報』九号(一九一八年五月)、一〇号(一九一八年七月)、一二号(一九一八年十一月)、一三号(一九一八年十二月)
- (31) これについては拙稿を参照。『朝鮮仏教総書』刊行計画について(一)・・目録の紹介(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五二、二〇一五年)、『朝鮮仏教総書』刊行計画について(二)・・計画の経緯(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』五三、二〇一六年)。
- (32) 鄭は『毎日申報』に獅吼生というペンネームで「朝鮮古仏書蒐集に就いて」という題目で四回の連載を行い、第二回目(一九二二年一月一日付)で「余は曹洞宗大学図書館の続蔵経を借りて、求めがたい海東古仏書を謄写し始めた。私は学窓の紛忙中に謄写するので頗る煩悶と苦痛を感じた。今になっても神經痛が治っていない」と苦勞を述べている。
- (33) 『朝鮮仏教叢報』第二二号(一九二二年一月)
- (34) 図書請求記号は H254.2
- (35) 『第一義』三二卷一六号(一九二七年)
- (36) 写真の説明は次のようにある。駒澤大学学長文学博士忽滑谷快天氏は今回朝鮮仏教研究の爲め一行三名と共に十八日夜入城、大和町の曹溪寺に宿泊したが、同博士は二か月間に亘りて三十一本山を巡回する予定で二十一日朝京城出發、金剛山に向う筈、なほ博士の入城を機として京城帝国大学仏教青年会主催にて二十日午後四時半より医学部第三講義室において『大乘仏教の通義』なる題下にて講演を試みる由にて一般の聴講を歓迎す。
- (37) 中根環堂『鮮満見聞記』(中央仏教社、一九三六年)六九頁

〈キーワード〉曹洞宗大学、朝鮮留学生、忽滑谷快天、鄭晧震